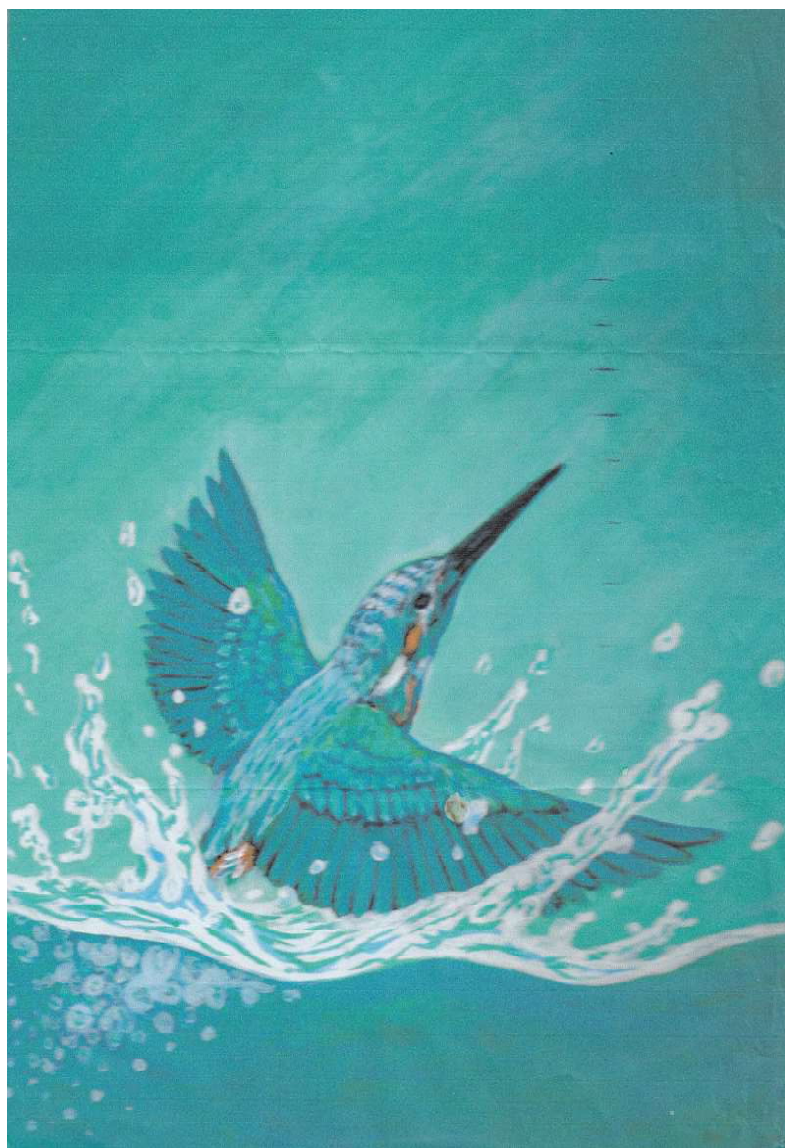


秋田県退職校長会結成50周年記念シンポジウム

『あきたブランド』創造の教師たち

日本一の先生たちがいた



令和元年10月12日（土）

秋田ビューホテル

主 催 秋田県退職校長会

【シンポジウム開催に当たって】

平成19年度(2007)、文部科学省が40数年ぶりに実施した「全国学力・学習状況調査」において、秋田県の児童生徒が全国上位の成績をとったというニュースは、秋田県内はもちろん全国を驚かせた。そればかりか、その後の「学力調査」においても力は維持され続け、令和元年度まで、12回連続でトップ級を続けている。秋田の児童生徒の学力は、本物であるとマスコミ等でも報道された。

秋田県教育委員会は、少人数学習のための加配事業が功を奏したとか、家庭の協力が浸透していて、家庭学習など好ましい生活習慣が身についているなど、児童生徒を取り巻く状況が良いことを挙げた。

そのような状況の中、平成20年4月、都内のJR電車内に掲示された広告の「秋田に学べ」というキャッチコピーが目を引いた。大手学習塾（栄光ゼミナール）の広告で、前年度の学力調査で6年生がトップの成績を収めた秋田県にあやかって、この広告を7,000枚も印刷し、4月末まで掲示したという。秋田の「何に学ぶのか」というと、小さな文字で次のように書かれていた。「全国学力テストで第1位（6年生）の秋田県。少人数制の授業、早寝早起き、予習復習は自宅でしっかり。好成绩を生んだ秋田の子どもたちの生活習慣に学びたいものです。」とあった。

なぜこのように大きな注目が集まったのかについては、もう一つ重大な理由がある。それは、あの「学テ闘争」で大問題となった、およそ50年前（昭和30年代）の文部省による「全国一斉学力調査（抽出）」において、秋田県が最下位であったことにある。それが半世紀を経て、奇跡ともいえるトップ級への躍進という結果に驚くとともに、誰しもがその理由について知りたがったのである。

文部科学省の施策（加配事業による少人数学級など）によって、学力が上がるというのであれば、全国どの県においても学力は向上するはずである。このような「枠組み的なもの」の比較では、この格差が何に起因しているのかという問題には迫ることはできない。児童生徒と教師による「教室内で展開されている質的な何か（授業のドラマ）」に焦点を当てた分析が大事であると考える。

その際、およそ50年にわたる「秋田の教育」において、秋田の児童生徒の成績を押し上げた理由について語れる組織は、そう多くはない。秋田の教師たちの「価値ある研修」をできるだけ明らかに（文章化）し、まとめ上げることができるのは、この時代を悩みながら駆け抜けてきた者として、その「記憶」と「記録」をもっている「私たち秋田県退職校長会」が最も適している集団であるという考えに至った。

現在80歳代の会員は、昭和30年代には、すでに教職にあった方もいる。最下位の評価をされて、その後の指導法に悩んだことだろう。また、70歳代の会員には、子ども時代に、全国学力テストを受けていた方もいる。子ども時代は最下位で、教員時代は全国1位

という不思議な感覚の方もいる。60歳代の方は、全国1位になってから、トップ級を維持するために頑張ってきた。その時代の社会の要請は様々であったが、秋田の児童生徒のために全力を尽くして寄り添ってきたことは疑いもない。

「全国一の児童生徒たち」のバックには「全国一の教師たち」が存在する。私たち退職校長会の総力を挙げて、その教師たちの授業力を培った「自主研修」を分析することこそが、「今後に生きる教員研修の方途」となり得ると考えたのである。

そこで、秋田県退職校長会の中に研修委員会を設置し、平成28年12月17日「第1回研修委員会」から、8名の研修委員で調査・分析を開始した。最初から熱を帯びた議論が続いたが、その論拠を得るために全県規模のアンケート調査を行い、現職教師と退職校長会員から自らの授業力を向上させた理由についてお聞きし、効果的であった研修について客観的に把握しようと考えたのである。

「教師による自主研修の積み重ねが、全国上位維持を可能にしてきた重要な要因の一つであり、これからも秋田の学習指導を支えていくであろう」という仮説のもとで、「教師の自主研修」の有意性を明らかにしたいと考えた。そして、検証のエビデンスを得るため、秋田県退職校長会会報90号に掲載されてあるように、この度の調査をお願いした。調査に当たっては「大切度」と「役立ち度」の2つに絞って設問を設定した。

教師の「自主研修」は、その教師自らの心の中から湧き上がる強い**研修意欲**によって始まり、日々の授業に生きるよう、指導方法の工夫・改善という方向で行われる。したがって、そこには「めざす方向」が存在するはずである。めざす子ども像、めざす学習、めざす指導などに向けて、不易と流行を勘案して最適の状況で実践されるのである。教師を取り巻く教育的な雰囲気も、大きな意味があるはずである。そうしたものを、秋田の児童生徒を全国一に押し上げた「秋田の教師の授業力」として実像化し、将来に向かって増幅・維持されれば、今回の取り組みが果たされたことになる。

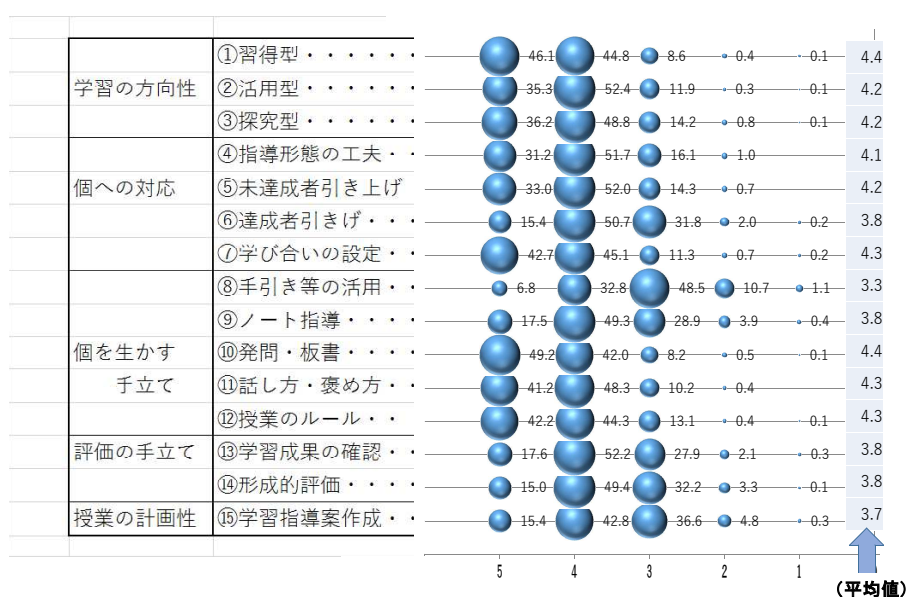
以上のように、今回まとめ上げられたものは、4年にわたる議論の成果であり、全県の現職・退職の教師の御協力による貴重な記録となった。これを機に「今後に生かす議論」が始まれば幸いである。

（秋田県退職校長会結成50周年記念誌 「はじめに」 より）

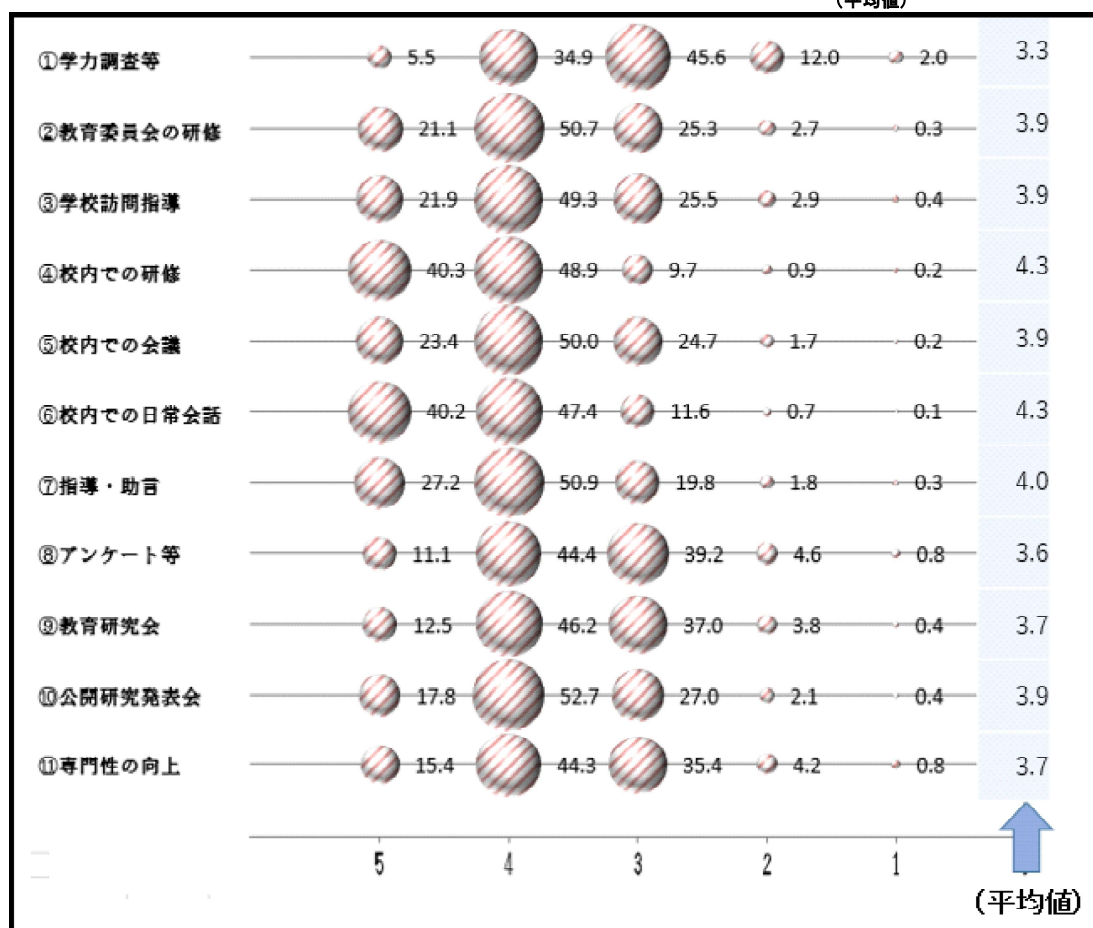
【アンケート調査】

秋田県退職校長会は、『秋田の教師』が、児童生徒を指導するために“どんな機会に、何を学んで、どんな力を身につけたのか”という教師の自主研修の有意性を明らかにするため、現職教員及び退職校長を対象として、平成29年7月にアンケート調査を実施した。

調査項目は、①授業の実践に当たって、内容・方法等の構想や具体的な指導場面などについて、どのようなことを、どのくらい「大切」にしてきたかを問う15項目（大切に度）、②自身の「指導力」を高める場や機会として、どのようなことが、どのくらい「役立った」かを問う11項目（役立ち度）で、いずれも1～5（5を＋方向とする）までの5段階評価とした。



【大切に度】



【役立ち度】

【秋田で誕生した「秋田型探究学習」】

◎探究的学習の過程と思考過程		〔理科：高学年〕	S61 <築山小>
過 程	探究的学習の過程	思考の種類	思考過程と教授事象
1 課 題 把 握	自分の考えを明らかにする過程 ①課題を把握する（問題をもつ） ②結果の予想を考える（文章化） ③予想の理由を考える（文章化） ④予想に基づく実験の計画を立てる（図） ⑤実験結果の予想を考える（図と文で）	A 個人思考 充分な時間をかけてゆっくり思考	⑦動機と期待 ◆動機づけの活性化 ⑧選択と注意 ◆目標を知らせる ◆注意の方向づけ ⑨想 起 ◆想起の示唆 ※子ども自身が方略を見つける
2 課 題 追 究	新しい分り方を追求する過程 ⑥グループ実験の計画を立てる（図） ⑦実験準備をする（用具や装置の工夫） ⑧実験による検証をする（観察記録） ⑨実験結果と予想を突き合わせる（討議） ⑩グループ実験のまとめ（発表準備）	B グループ思考 個人思考をもとにしたグループ討議	⑪検 索 ◆検索の手がかりを利用させる ⑫実行反応 ◆般化への努力をさせる ※集団思考による概念化への努力
3 課 題 整 理	自分なりの概念を形成する過程 ⑪グループ発表による比較・検討をする ⑫最初の予想から結果までを振り返る ⑬全体討論による法則化を図る（文章化） ⑭感想をまとめ科学する心に浸る	C 全体思考 学級討論 D 個人思考 個人思考への帰着	⑬保 持 ◆記憶の貯蔵 ⑭強 化 ◆フィードバック ※何が実際に学習されたのかを

* 6年生理科「水溶液の性質」の実践における「探究型の学習過程と思考過程」が提案されている。なお、この実践記録は、前後四年間の研究を対象に、時事通信社の「平成元年度第5回教育奨励賞」において文部大臣奨励賞を受賞した。¹⁵⁾

【「教育の正常化」を標榜する教育思想による「秋田の教師の構え」】

◇ 秋田の教師の構え

平成19年度の「全国学力調査」開始前夜までの

教師の自主研修への構え

- ① 昭和30年代の「全国学力調査」実施時代を、最下位からの脱却を願いに全力投球の時期を過ごした教師たちは、より良い授業を求めて「授業研究」に目を向けていくが、「授業の効率化」という秋田県教育研究所の示した方針によって、向かうべき方向が定まっていた。

模擬テストなどの回数を多くして児童生徒を鍛えることをせず、
日々の「授業の質を高めること」で学力を保障しよう

- ② 昭和40年代から、「教育の正常化」の下に、教育本来の目的の遂行の中に「学力向上」もあるとする考え方で、児童生徒の人間形成のために教師は教育研究に邁進するべきであることが共通理解された。

※ 「〇〇教育」等の、「～のために」する教育ではない。

人間形成という教育本来の目的を見失うことなく、
教育研究に励む教師になれ

- ③ 他県が教師主導の「詰め込み教育」に走ろうとも、秋田県の教師は児童生徒が自主的に学ぶ意欲を重視した「主体的な学習」に意を注ぐことで授業力をつけてきた。

「教え込み」ではなく児童生徒の意欲に基づく学習を求めよう

- ④ 積極的に官民の研究指定校を受け、校内の教師同士（同僚）が力を合わせて公開授業研究会に立ち向かい、多くの教師との研究交流を経て、目の前の児童生徒のために、より良い学びを提供できるよう教育研究を積み重ねることに努力してきた。

同僚と知恵を合わせて「児童生徒の学ぶ力を伸ばす」指導法の工夫を

※ 以上のように、秋田県の教師たちは、児童生徒の「学びを中心に据えた」授業研究を求めて、自主的な研修に尽力してきた。その努力の成果として行き着いたのが、「秋田型探究学習」であり、長年にわたる先輩たちの努力の結晶なのである。大事にしていくべき、秋田県教育の財産である。

【アンケート調査を振り返って】

秋田県退職校長会は、令和元(2019)年10月に結成50周年を迎えるにあたり、平成28(2016)年12月、研修委員会を立ち上げ、日々の授業に取り組んでいる(いた)秋田県の教師たちの実態を把握しようと本誌をまとめた。その目的は、秋田の教師のすばらしさの大本は、児童生徒の学びに資するための「自主研修の積み重ね」にあったのではないかとし、このことが秋田の学習の支えになってきたことを明らかにすることであった。目の前の児童生徒の学びに真摯に立ち向かったひたむきな思いがあったことを裏付けようとしたのである。

本誌の構成は、次のようになっている。第Ⅰ章の秋田県の学習指導(授業風景)の変遷は、秋田県教育の流れの中で秋田の教師の授業研究について考察したものであり、第Ⅱ章の学習指導に関するアンケート調査から得た秋田の教師たちの実態は、現状把握のためのエビデンスを得るための調査分析であり、第Ⅲ章の秋田の教育あすを見つめては、「大切度」と「役立ち度」からの提言、第Ⅳ章の秋田県の教師の授業は、「秋田の教師」の授業への思いを集めたものである。

学習指導を展開するに当たって、何を大切にしたいのかの「大切度」と、何が役立ったのかの「役立ち度」に限定し、アンケート結果から得られた多くの反応に基づいた情報を分かりやすく解説した。さらに学習指導を展開するための「提言」をした。

「大切度」については、全体的に高い数値を示していることから、多くの機会を捉えて学習指導に必要な事項として生かしていることが分かる。「基礎・基本」「学び合いの設定」「発問・板書」「話し方・褒め方」「授業のルール」の項目に顕著である。一方で「手引き等の活用」や「学習指導案の作成」については、高い数値とは言えないが、今以上に大切にすべきことであると評価していることが分かる。また小学校と中学校の教師による捉え方や年代による捉え方の違いも見られる。校種間の相違は、学習者の成長過程に添った学ばせ方によるものか、小学校の教師は丁寧な発問や板書を、中学校の教師は教科の専門性が重視されているように思える。双方とも、成長過程に伴った学習集団の生活を重視した指導を心がけ、生活実態にあった指導を展開している。年代による捉え方の違いについては、一概に結論づけることはできないが、60歳代以降の教師が現役時代にかなり重視してきたと思われる「手引きの作成」や「学習指導案の作成」にさらに重きが置かれるような取組が必要であるとした。とりわけ、学習指導案は授業構想そのものであることから、授業にどれくらい位置づけられ、展開方法、反応予測、評価方法などを盛り込もうとしているのかが問われる。

「役立ち度」についてもまた、全体的に高い数値を示しており、多くの事項を自身の学習指導に役立てようとしていることが分かる。校内研修となる「研修の機会」「諸会議」「日常会話」「指導・助言」などが自己研修に役立つとする高い評価を受けており、同僚や管理職からの指導等が強く反映していることが分かる。比較的低い評価項目になっている「自己研鑽」については、自己研修していると強く主張することを恥じらう県民性が認められるように思う。ただ、さらなる研鑽を求めようとするための時間確保や機会を保障

する組織的な試みが必要である。同様に、教育行政上の施策として実施されている諸調査を自己研修に活用できるかとする「教育委員会の施策等」については、あまり役立っていないと評価している。このことについては、諸調査が役立つかとする問いに、より高度だと捉えているのか、身近な研修の機会ではないと把握しているのか。それは後者であるように判断される。自己研修の動機づけとして、経験差や資質・能力の差によって、対象者が必要としている内容をきちんと把握したうえでの研修の場を設定したいものである。このことも組織的な検討事項である。

秋田県の教師たちによる学習指導は、全国上位を維持するに足る望ましい方向に進んでいる。県退職校長会結成50周年を一つの節目として見直したとき、秋田県の教師たちが努力している姿が、今こそ認められてきたと確信している。さらに一步、納得のゆく授業構想を盛り込んだ「**学習指導案**」の検討と自己研修の動機づけを時宜を得ながら展開している教育こそが秋田の発展を支えるものであるとしたい。

秋田の教育を支え、高い水準に向上させてきたのは、きめ細かな指導と児童生徒を前面に見据えた学習指導計画と実践によるものであり、このことに気づかせていただいた多くの教師たちによる指導・助言や励ましなどの「**同僚性**」に負うところが大きい。教師間の同僚意識が学び合うことの確かさを裏づけてきたのである。

秋田県の教師たちが学習指導を実践するうえで、ただひたすらに児童生徒の力量を高めようとする方策を追究してきたことが明確にできたように思う。約4か年に及ぶ研修委員会を中心にした試みであったが、この成果を本誌にまとめ得たので、学校現場はもとより、それぞれの教育機関等においてもぜひ活用いただきたい。

本誌の題を『秋田の教育 あすを見つめて』とし、「あきたブランド」を育て上げた教師たちの実績と心意気を讃えたい。今後とも、我々、秋田県退職校長会は、秋田県の教育を支持・支援しながら、現場の教師を応援し続けていくことを、ここに約束する。

（秋田県退職校長会結成50周年記念誌 「要約」 より）

(1)

秋田県
退職校長会

会報

題字 秋田 師山 書 (秋田市会員)

第 93 号

秋田市手形学園町1-1

秋田大学教育文化学部

同窓会旭水会 内

令和元年7月25日 発行

秋田県退職校長会



今こそ、教育の正常化を

五十年という歳月

秋田県退職校長会会長 佐藤 俊彦

○ 君たちは創造するためにだけ学ぶのだ。麻痺した時代において、知恵が贈り物であるという感覚を、私たちは忘れてしまっている。(二ーチエ)

現代は、情報機器や人工知能の発達によって、膨大な知識をあまりにも手軽に手に入れることができるようになり、自らの中に知恵を生み出す「学び」の重要性に対しての感度が鈍くなっている。

いわゆる「平成の学力テスト」が始まってから十二年になるが、学校現場に何か歪みが生じてはいないか心配である。前年度の学習内容を、次年度の四月に調査され、半年後に結果が出され、およそ一年後に前年度履修の欠陥について補習させられる。この繰り返しで毎年続くと、「真の学び」の保障や正常なカリキュラムの遂行はできているのだろうかと不安になる。

「昭和の学力テスト」が昭和四十一年度に終了してから、多くの県は「県独自の学力テスト」を作成して、子どもたちを長年鍛えてきたという。しかし、「平成の学力テスト」が始まったら、ある県は、五十年近く鍛えてきたにもかかわらず、下から数えた方が早いところまで落ち込んでいた。また別のある県では、追い詰められた中学生の自殺者まで出て、県議会から「行き過ぎたテスト対応」に対しての是正勧告がなされたという話を聞いた。「模擬テストで鍛える」ということは、「真の学び」とは、別の次元なのだ。

○ この瞬間を見よ。この瞬間という門から、ひとつの長い永劫の道が後ろに向かって走っている。すなわち、我々の後ろには一つの永劫があるのだ。(二ーチエ)

受験学力にのみ注意を払うことは、公教育ではありえない。教育本来の目的に照らして、人間教育を目指すべきであることは、周知のことである。しかし、報道や雑誌で全国順位などが独り歩きを始めると、学校が責められるということがある。「昭和の学力テスト」で最下位であった秋田県は、多方面からの非難が相次いだことだろう。でも、秋田県は、学力向上のために、ある時点で、教育の正常化の道を選んだ。

「昭和の学力テスト」が終わって、それまで必死になつて学力向上に邁進し、全国最下位からの脱却を念頭に努力していたが、四十二年度、県の方針が決まった。当時の秋田県教育長伊藤忠二氏の考え方は、「学力の向上は、教育の正常化によって達成されねばならぬ。」というものであった。「何かのために教育」ではなく、本来の教育目的に向かって努めるところにある※ と言った。全国が偏差値教育や詰め込み教育になだれ込んでいた最中に、教育の正常化を掲げたことに大きな意味がある。そして、「学校教育の指針」で、「主体的に学ぶ子供の育成」を促した。

その結果、教師の自主的な研修が活性化し、授業を大事にする教育文化が、秋田に根付いたのである。

※ 秋田県教育研究所 昭和四十二年度研究紀要「教育研究と実践の道しるべ」の序文で述べた言葉